

『視能学 第3版』

正誤表

本書におきまして、下記の通り記載内容に誤りがございました。訂正してお詫びいたします。

(2022年5月18日作成, 2026年3月3日更新)

刷	頁	該当箇所	誤	正	更新日
1・2刷	79	図 I -E-8 色覚異常の遺伝形式 (赤枠の箇所)	<p>正: 正常 X: 正常遺伝子              異: 異常 X': 異常遺伝子              保: 保因者</p>	<p>正: 正常 X: 正常遺伝子              異: 異常 X': 異常遺伝子              保: 保因者</p>	2023/8/4
1刷	173	図Ⅲ -B-6 Vieth-Müller ホロプタ円 (緑の円) と Panum の融像感覚圏 (灰色の領域)			2022/5/18
1・2刷	277	左段 5 行目	差明	羞明	2026/3/3

刷	頁	該当箇所	誤	正	更新日
1・2刷	361	図 I-B-57	a' は右眼の中心窩あるいは道づれ領の抑制	a' は左眼の中心窩あるいは道づれ領の抑制	2023/7/18
1・2刷	370	左段 1 行目	偽斜視 pse <u>du</u> strabismus	偽斜視 pse <u>u</u> dostrabismus	2025/10/31
1・2刷	405 ～ 406	406 頁左段下から 4 行目	<u>g) 眼心臓反射</u> <u>(【1】 - I -D- 「眼心臓反射 oculocardiac reflex」 p45 参照)</u>	<u>d) 眼心臓反射</u> <u>(【1】 - I -D- 「眼心臓反射 oculocardiac reflex」 p45 参照)</u> として 405 頁右段 16 行目に移動	2025/10/31

## 『視能学 第3版』

### 補 足

本書におきまして、下記の記載内容について補足いたします。

刷	頁	該当箇所	内 容
1・2刷	75	右段3～5行目	Leber 遺伝性視神経症では、中心視力が不良であっても、CFF が保たれている症例が多い。
1・2刷	314	左段2～3行目	(Leber 遺伝性視神経症の) 多くは大きな中心暗点と CFF の著明な低下を伴う。

#### ※Leber遺伝性視神経症における中心フリッカ値について

Leber 遺伝性視神経症 (LHON) における中心フリッカ値 (CFF) についてはさまざまな見解が示されています。LHON 認定基準<sup>1)</sup> では、視力や視野障害が重篤となっても、CFF は正常域にとどまる、ないしは回復する例が多く、その理由として運動視を司る Y 網膜神経節細胞ないしは外側膝状体 magnocellular 層が保全されるためと記述されています。一方、LHON における研究報告<sup>2)</sup> では、経過中の CFF の最終値は、正常眼と比較して有意に低下していたこと、発症後 1 年以内に低下した CFF は発症後 2 年以降有意に改善し、CFF 改善例では視力も改善傾向となると示されています。

臨床では CFF がいったん低下し、その後回復する例もみられるため、病状のどの時点を主とするかで CFF に関する解釈が異なる場合があります、本書 p75 と p314 の相違も同様の理由によるものと思われます。

1) 中村 誠ほか：Leber 遺伝性視神経症認定基準。日眼会誌 119：339-346，2015

2) 高橋洋平ほか：Leber 遺伝性視神経症における限界フリッカ値と視機能についての検討。神経眼科 34：156-160，2017

(編集者補足)